



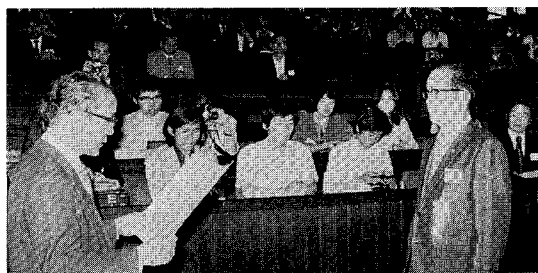
火星の観測をふり返って

佐伯恒夫



月日の経つのは早いもので、赤い火星の妖しい美さに魅せられて、小望遠鏡をふりまわし始めたのは既に45年もの昔になる。それ以来の私の歩みをふり返ってみると、日本での火星表面地理学確立のための努力の継続であったの一言につきると思う。

その昔の1930年代の日本には、惑星や月面の眼視観測に関する参考文献は絶無に近く、私たちは英国天文協会 British Astronomical Association の紀要や当時刊行されたばかりの E.M. Antoniadi の名著「惑星火星 La Planète Mars」(1930)などを貪り読んで観測に励んでいたものであった。ところで1931, 33, 35年と3度の火星接近を送って、1937年の接近を目前にした時には何時の間にやら木辺成磨(30cm反射)、故伊達英太郎(25cm反射)、前田静雄(20cm反射)の諸氏と私(花山天文台の31cm屈折)の4名の火星狂によるダイヤモンドグループが出来上がってしまい、何れも20歳前半の体力、気力と視力に恵まれた若人ばかりであって、アントニアヂがムードン天文台の83cm大屈折による観測を基盤として著わした La Planète Mars に発表されている火星表面の様子の総てを観測によってチェックし、アントニアヂが見落しているものやミスを探ぐり出してやろうなどと、若気の至りとは云え、途方も無いことを考えて、それぞれ観測に努力し、1~2週間毎に観測結果を持寄っては比較検討し侃々諤々の議論をたかかわしたものであった。何しろ4人共に最も視力の鋭い年代であり、気流状態さえ良ければ自分で呆れるほど火星表面様子の微細構造が見えてくると云う有様であったため、会合ごとに意見や異論が百出するという次第であったが、残念ながら、よくよく検討してみると、その何れもがアントニアヂの著書に明記されているものばかりとの結論に落ち着くということの繰返しであって、ガッカリさせられ乍らもアントニアヂの偉大さを思い知らされて感歎するのみであった。こうした日々を過ごしていた最中の6月2日夜のこと、5月末から異変が発生して



いるのではと気にしていたキムメリア人の海(火星南温帯の経度 $180^{\circ}\sim 240^{\circ}$ にかけて横たわる葉巻型の模様)の北西端の部分(ローエルの火星図では、ここをゴメル湾と呼ぶ)が北方へ向けて拡大し始めていることを確認し、つづいて夜が更け、火星の自転によって有名な大シュルチスが南中してくると、その大三角模様の北西端にくっついて、何やら網膜にひっかかるものを感じられる! その正体を解明しようと、そのまま日出直前まで望遠鏡にかじりついてお蔭で、とうとう、これが、大シュルチス比西端から流れ出ている2本の Canal (Asopus と Astusapes) の交点に小斑点が発生しかけていて、それが31cmの分解能の1/2位の直径をもつ小さなシミみたに見えているのだと判明した。こうして遂にアントニアヂの著書に記されていない新しい火星模様の発生を2つも検出することに成功したものの、それ以後の梅雨の悪天候に妨げられて、観測仲間の明確な同定観測を得られぬまま、夏の悪気流中に火星を逸してしまった。これが1939年の大接近時に南アの天文台に出張観測した E.C. スライファーによって発見されたゴメル湾の肥大と大シュルチス北西端に発生した新斑点であり(この年、前田氏と私は中支の戦場に在った)、前者は、その後さらに発達を続け、遂に1946年には赤道を越えて北温帯に到達し、そこに新斑点を発生させたが、1952年には村山定男氏(20cm屈折)が写真撮影に成功し、ついで1954年になって E.C. スライファーが写真に撮って火星観測史上最大の異変が発生したと発表し、はしなくも私の1937年の観測の正しさを証明してくれたものである。この新斑点をラオコーンの点、大シュルチス北西側の斑点をアンチゴネの泉(共に1955年海老沢嗣郎氏命名)と呼び現在でも見え続けている。こうして1930年代の私はダイヤモンドグループの仲間と共に若人の特権である鋭敏な感受性をフルに活用して大アントニアヂに挑み、日本での火星地理学の開拓に全エネルギーを注いだものであり、この時代の成果に基づいての観測が現在まで続けられているのである。

ヴァイキング1, 2号の無人探査機の軟着陸による成果と周廻船の観測結果を固唾のみつつ待ち構えながら、火星観測の新時代の到来を心から喜んでいる私は、G.V. スキアパレリに始まり E.M. アントニアヂによって完成された Areography (火星表面地理学) の流れを汲む眼視観測者の最後のグループの一人となるのかも知れないと考えている次第である。しかし、その反面、有能な後継者の出現を心秘かに待望し続けている事も事実である。